原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第五十四号

写真上は、新しい転場のなかまといつしよに、工場のお庭でパチリ。左は、爆発1カ月前の10月10日、若松から来組中の木下幹男さんが写したもの。夫芳男さんの最後の写真となつた。

原告団レポート

遺族――片桐政子さん

亡夫の遺志つらぬく

心のなかに、三池の誇り抱いて……

今、兵庫で歩きつづける

四十四歳で

片桐政子さん。五十二歳（大正十二年一月二十一日生れ）。昭和三十八年十一月九日の、あの三池大災害が生んだ遺族の一人。

命奪われた夫の芳男さんは、当時行年四十四歳（大正八年一月十六日生れ）だった。

そのころ一家は荒尾市緑ヵ丘社宅桂町七十五棟の鉱員社宅に住んでいたが、十七歳（二十一年二月二十六日生れ）の長男靖智さん、十五歳（二十三年六月十六日生れ）の長女時子さん、十二歳（二十六年一月二十六日生れ）の次男謙治さん――という三人の子どもが後に残されたことを思えば、彼としては自分自身の人生のうえからも、また一家の大黒柱としての責任のうえからも、すべてはこれからだったのである。

保安係員が

芳男さんの三池炭鉱入社は、太平洋戦争終戦後のあの虚脱期の二十二年五月十四日だった。二十八歳のときで、技能工員として三川鉱で働くようになる。

まじめさがかわれ、翌年には技能工員養成所の指導員へ。二十七年にはさらに、鉱員の身ながら保安係員となった。

その彼が、その命をもぎ取られたとき坑内保線専門の仕繰工だったが、これはあの三池大闘争以来断固として節をまげず、たたかう三池労組に踏みとどまったため会社から見かぎられ、お手のものの差別配転によるものだった。

彼が、なかまの命を守る仕事の保安係から追放されたとき、すでに彼の運命はきまったも同然だったのである。神ならぬ身の知るよしもなかったが。

死体洗い場

芳男さんが冷たい遺体となって妻政子さんのもとへ帰ってきたのは、爆発が起きてからもう二十時間以上もたった翌る十日昼過ぎだった。

トラックに積まれて、三井天領病院に運ばれてきた。政子さんは変り果ててしまった夫の体にとりすがりながら、死体洗い場にあてられていた耳鼻咽喉科へ。

担架で遺体がかつぎこまれると洗い場のコンクリートのうえにコロリ。そこで夫芳男さんの遺体は丸裸にされ、冷水をジャージャ浴びせられ、洗われた。

たくみにホースをあやつる係員の、余りにも非情な手つき。洗い終ると、あの白いサラシの（きょうかたびら）を着せられ、すっかり死装なった芳男さんの遺体はいよいよ柩へ。

いっさいを、政子さんには正視することができなかった。だが、長男の靖智さんはカッと両眼を見開き、一部始終をジーッと見つめていたという。かけがえのない自分の父親の命を奪った奴の姿を、あるいはそこにさがし求めていたのかも知れない。

この大打撃

三池の労働者の怒りが爆発した三池闘争直前の三十二年に急性腎盂結石膿腫をわずらい、すでに左腎臓摘出の大手術を受けていた政子さんの体は、もともと強い方ではなかった。そこへこの大災害だったから、打撃は余りにも大きかった。

衰弱甚しく、爆発後一カ月というその年の十二月肺浸潤罹患。まずぶっかったのが、治療費。

三井病院の平井分院からさえ、さっそく「もう三井鉱山在籍者ではないから」、と現金支払いを求めるツケがきた。腹が立つやら、なさけないやら、悲しいやら。

あのとき、勤続十六年という芳男さんの命とひきかえにもらった退職金はわずか六十三万円。労災保険からの補償やら弔慰金などを含めてさえ、政子さんの手に渡されたのは百八十万円余り。この金に手をつけるのは、政子さんにすればそれこそ自分自身の身を削がれる痛みようだった。

それでも体にムチを加え、翌三十九年に荒尾アソニット（遺族対策のため誘致された企業）が操業すると、まるで追いたてられるように入社の手つづき。草葉の蔭から聞えてくる、芳男さんの声だけがはげましてくれた。

母国引揚げ

結婚は、太平洋戦争末期の二十年四月二十五日に満洲の撫順で。芳男さんが二十六歳で電炉工場に働き、政子さんが二十二歳で、満洲経金属の電話交換手をしていたとき。

ところがそれから四カ月後の八月十五日、わが国は太平洋戦争敗戦。満洲の日本人の地位は逆転した。そのとき政子さんはすでに長男の靖智さんを懐胎していたからとりわけ彼女のその後の苦しみは言語に絶した。

その政子さんの肩のうえに、父親が応召していったまま行方知れず、頼む母親を敗戦後の混乱のなかでうしない、あわれ天涯孤独の身となった二人の幼ない兄弟の命までがおぶさってきた。彼女の実姉の子どもたちだった。

翌二十一年七月、政子さんは生れ落ちてからやっと四カ月にしかならぬ長男靖智さんの柔らかな体を、サラシで自分のおなかにくくりつけ、背にはリュックを背負い孤児となった実姉の子どもの手をひきながら、無事母国へ。（その間、実姉の子どもの一人は死亡。一人は無事引き揚げ、その後ソビエト抑留生活を経て帰国してきた父親にめぐり会い、今新潟で共に暮らしている）

二家が落ちついたところは、芳男さんの故郷――大牟田市白川の実父母のもとだった。

戦後の大恐慌の嵐のまっただなかのこと、芳男さんの仕事なし。幾らかもち帰ったお金はすぐ使い果たしてスッテンテン。やむを得ずヤミあきないへ。

そんな一時期、一家は宮浦公園脇の防空壕下に、六畳一間きりのバラックの家をつくって住んだこともある。

不幸の連続

前述のように、芳男さんが三池炭鉱に入社したのは二十二年五月十四日。芳男さんは宮浦公園防空壕下のバラックの家から自転車で通勤。ところが芳男さんの入社を待ちかまえていたように、政子さんが盲腸炎に。

入社したばかりのこと治療費の出どころもなく、芳男さんは自分のなけなしの着ものなどをヤミ市にもっていって売ったり、父親から洋服を借りて質屋ののれんをくぐったり……。「自分が体が弱いばっかりに、顔見知りの多い大牟田で、さぞかし夫も心苦しいだろうと思いますと、余りの申しわけなさにベッドのうえで泣いていました」、という政子さん。

その後、長男靖智さんの病気、自分がまた大病（前出の腎臓摘出）と不幸がつづき、三池労組も大闘争へ。たたかいの真最中、三池は組織を真二つにひき裂かれ、芳男さんは統一を守り抜かねばと粉身砕骨。ついにのぞみ絶え、あげくの果てにわれとわが身を資本の恐るべき合理化の牙でかみくだかれてしまったのだ。

今は兵庫で

今、政子さんは大牟田を離れ、兵庫で暮らしている。すでに立派に大人となり、妻子まである長男靖智さん（高槻市に居住）のすぐ側に住むことを余儀なくされたので、住まいは西宮市今津久寿川町九の六のアパート・白梅荘。四畳半に三畳の二間でのひとり暮らし。

「結成以来お世話になった遺族会の皆さんとお別れするのがなんといってもつらく、大牟田を離れる決心が固まるまでは夜も眠れませんでした。

そんなとき寝床から起き出しては仏前にすわり、『おとうさん私はどうしたらよいでしょう』と幾度泣いたか知れません。やむを得なかったとは申せ、すまなさでいっぱいです」

政子さんは、そのころを述回しながら、涙をこらえる。

三池がある

今も、政子さんの体調はよくない。右腎臓結石の痛みに悩まされ治療をつづけている。「自分には病気が一生つきまとっているようです」と嘆きながらも、気丈な政子さんはこの地の企業――、甲南電機で働いている。新しいなかまもできた。でも、負けそうになることもあるが、そんなとき、政子さんは「とにかく自分には三池がある。三池でたたかってきた誇りがある。『抵抗なくして安全なし』というあのスローガンをつくり出した私の三池。三池という言葉のもつ重みを思え。裁判闘争も起こした今、負けてなるか。今こそ亡夫の遺志をつらぬかねば……」、と自分をしかりつけながら歩いている。

とにかく、資本の人間無視が、果てしなくつくり出してゆく労働者の悲劇は、すべて自分の身の悲劇でもあるのだ。この認識をもって、まわりのあらゆる被災者・犠牲者と連帯しながら、夫の命を奪った三井の責任を追及してゆくのだ。世間の人もきっとわかってくれる――。いつとは知れずうち固まった確信でもある。

このままでは死に切れぬぞと
夫の声
人災と知れこの事故許さじ
ただひとり
いたわる者とてなき日々に
夫の日記生きよとはげます

政子さんが書きつづけている、短歌ノートのなかの二首である。

去年の一一・九大集会のとき、三池のなかまたちとたたかうことを誓った政子さん。タスキをかけハチマキをしめると、胸に湧く新たな怒り。